

# のぞみはなげくひかりはあめ

上村文隆

一、のぞみはなげくひかりはあめ

昨夜「ブラタモリ」で明日香をやっていた。

ブラタモリは行けない所をちゃんと見せてくれる。行った所でも新たに気づかせてくれる。飛鳥寺の伝道掲示板を見た時にタモリさんが、自分が見た中で一番面白かったある寺の言葉を話し始めた。

「のぞみはなげく、ひかりはあめ」

という言葉。住職が新幹線の改札で言われて、ピンと来たという。

私も直ぐに新幹線を思い出す。私が利用する岐阜羽島駅にはのぞみは停まらないけどひかりは停まる。

時々満員で座れないことがあるけど、名古屋駅で大勢が降りるので、座れる時がある。だから私はのぞみには乗ったことがない。

この言葉は、私たちが望みを持ってなくても、仏の光はちゃんと当たっていることを示している。タモリさんは解説していた。

私はそれを聞いて妙に感動してしまった。望と光を区別していること。そしてひかりがある意味に。

私はここで止まっていたが、ある方から「こだま」もあると教えていただいた。

「のぞみはなげく、ひかり（仏の智慧光）とこだま（仏の呼び声）はちゃんとあめ」これには参った。

二、月は見えない、ひかりは見えない

法然上人の有名な和歌がある。

月影のくだらぬ里はなげくせ

ながむる人の心にと住む

私は月影と影を入れられたわけをすいぶん長く誤解していた。

月の光があたるということは、月は当然見えていると思ひ込んでいた。

この歌は、月と仏、月影と仏の慈悲の光、ながむる人と私がアナロジーになっている。だから、つい、月は見えるのに月（仏）はなぜ心に住むのだろうかと思っていたのだ。

「指月の譬え」では、私たちには月は見えていない。

そう考えた時に、月影の歌をずっと読むことができるようになった。

月の光が里の全てにとどいてるように、仏の光もすべての人とつながる。

その月影に気がついて月を眺めようとするように（月はまだ見えなくてもながむる）、「あめ」。

仏の慈悲の光に気がついて、仏を見ようとした人（念仏を称えた人）の心の中に（すでに）  
仏は住んでいる。

「月影」と言われたわけがやっと納得できた。  
仏の慈悲の光は私たちの影を明らかにする。  
私たちに見えるのは、その影（煩惱）である。  
でも、私たちの影が見えるのは、仏が私たちの心に住んでいるからである。

### 三、月が私を見ている

月を真実Ⅱ仏に譬える時、  
私は、指している人、それを見ている私の二つの立場しか考えない。  
だから、私が月を見ていると思っている。

でも、本当は、月（Ⅱ真実Ⅱ仏）が私を見ているのだ。  
月は、「私に気がついてくれ」と願っている。  
愚かな者たちに何とか気がついてほしいと。  
しかし、愚かな人たちは私（Ⅱ月）を見ようとしません。  
その人たちに何とか気づいてほしい。

ところが気づかない。見ようとしません。  
それでも、月はあくまでも我々を照らしている。  
決してあきらめない。

さて、ここからは気づかず、見ようともせず、すぐにあきらめてしまう私の話。  
なぜ救わねばならないのか、どういう光をあてているのか、どうしたら気がつくのか、な  
ぜ見ようとしらないのか。  
そう考えているのは私である。

理由を考え、方法を考え、あれやこれや悩む。  
なぜ悩むのか、なぜ気づかないのか、なぜすぐにあきらめるのか、答は簡単である。

「私は愚かである」から。  
月は、  
「そんなことはどうの昔にわかっている。だから、我が名号を用意した。あとは任せよ。」  
と言われる。

私はただ念仏するしかない。が、それはスタートである。  
他力とは無我ではない。  
私を無くしてはいけない。  
私と思うものを大切にしたい。  
他力とはその私を見つめるもの。